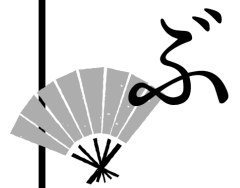


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第五十七回

ふぐ鍋^{なべ}

鍋

の恋しい季節です。何と言っても一番の美味はふぐ鍋
だと思いますが、ふぐは高価なんです、特にトラフグ
は。トラフグの養殖、何とかありませんかねえ。

昔の諺^{ことわざ}に「ふぐは食いたし命は惜しし」というのがあります。今で言うところ、ハイリスク・ハイリターンということになりますか。美味は美味なんですが、調理師免許ができるずっと前には、相当数の人がふぐの毒で命を落としています。今はふぐ調理師免許取得者もふぐ取扱責任者などに名を変えました。因^{ちな}みにふぐ毒はテトロドトキシンと言うそうです。

で

すから昔の人は、ふぐ鍋を前におっかなびっくりで――。
「おや幫間^{ほうかん}の一八じゃないか、よくきた。ちようど今、
一杯やろうと思ってたんだ。こっちへお上がり。一緒にやろう」
「いつもありがとうございます。ご相伴に預かります。ところ
で肴^{さかな}は一体なにで？」「鍋だよ」

「鍋、けっこうですな。こういう寒い晩には一番で。酒と鍋の
両方で体があつたまるという」

「ほら蓋^{ふた}を取ったらこの湯気だ。煮えごろだ。遠慮なくお食べ」
「旦那。この白菜と春菊の間の、これは魚の白身ですか。こりや

何てえ魚で？」

「たいそう美味いという噂だよ、気にせずたんとお上がり」

「だったら旦那が先に食べてくださいよ」

「いや、今日はおまえが客なんだから先にお上がり」

「おかしいな、私にばかり勧めて。旦那、これってまさか？」

「そうだ、料理屋から鉄が手に入ったんだ」

「鉄？ 土鍋にしか見えませんが」

「鉄砲、つまりふぐだよ。西の方じゃ当たるから鉄砲と言うんだ。鉄ちり、鉄さとも言うだろ」

「ヒョエー！ なんで私ばかりに？」

「おまえが無事だったら私もと思ってね」

「そりゃひでえや。あ、旦那、オカミさんが」

「どうした、台所が騒がしいが」

「いつものオモライさんがきましてね、何か残り物をとって帰らないんですよ」

「帰らない？ この寒さだ、よっぽどひもじいんだろ。あ、そ
うだ、ちょっとお待ち。あるよここに！ この鍋をよそって持
たせてあげなさい。おい一八、男の後をつけ、無事かどうかを
見届けてきなさい。無事だったらあらためて一緒に食べようじゃ

ないか——。どうだった？」

「見届けてきました。男は橋の下で大酺をかいてました」

「酺って、まさか毒で死にかけてるんじゃないだろうね」

「大きな声で寝言を言っていましたから、ピンピンしてます」

「そりゃよかった。ではこっちも食べよう。おまえが先に」

「いえ、旦那こそ先に」

「よし、では一二の三で同時に食べよう——。美味いねふぐ鍋っ
てものは。噂通りだ」

「私もこんな美味いもの、生まれて初めてです」

美
味い美味いと二人は、たちまち雑炊まできれいに食い
尽くしました。

「また台所が騒がしいぞ。あ、あの男が入ってきた」

「先程はどうも」

「鍋の味をしめたんだらうがこの通り、みんな食っちゃって残
り物はもうないよ」

「で、お二人、体はいかがで？」

「何ともないよ」「かえって元気なくらいで」

「そうですかご無事で。では私は先程いただいたものを、これ
からゆっくり味わいます」